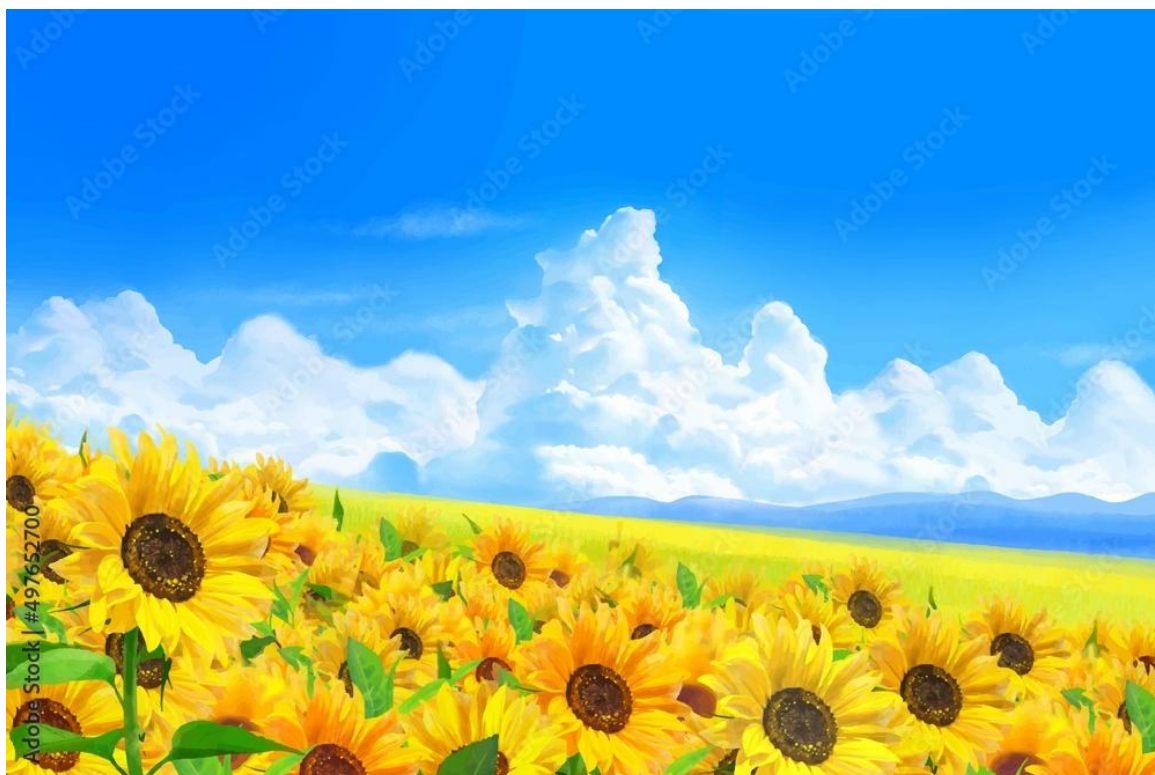


PASセルフケアセラピー看護学会
ニュースレター 最終号
2025年8月27日発行

PASセルフケアセラピー看護学会広報委員会



皆様ご承知の通り、2025年8月末をもって、当学会は解散します。解散に当たり、ニュースレターの最終号を届けます。

本ニュースレターでは、理事会からの最終のメッセージ、トレーニング委員会が主催した最終講演&座談会の報告及び参加者からのご意見などを掲載しています。

ご寄稿くださった全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

皆様、最終のニュースレターでひと時、ほっとする時間をお楽しみください。

PASセルフケアセラピー看護学会 閉会のお知らせとご挨拶



会員の皆様へ、PASセルフケアセラピー看護学会理事会よりご報告いたします。
PASセルフケアセラピー看護学会は、学会規約第43条に則り2025年8月31日をもって解散致します。

2024年9月の総会でお知らせ致しました通り、学会の今後の在り方について、理事会はさまざまな対応について慎重に検討し、複数の会員と意見交換会を含め、審議を重ねてまいりました。その結果、指導者の育成が充分ではない現状のなかで本学会の目的に沿うことができなくなり、このままでは会員の皆様に多大なご迷惑をおかけすることが必至であろうとの判断に至りました。理事として、このような事態を回避できなかったこと忸怩たる思いでいっぱいでございます。

PASセルフケアセラピーはOrem-Underwoodセルフケアの理論に依拠し、精神力動論を基盤にしたPAS理論を統合させて展開する技法を説明しています。その臨床的適用は5大疾患の慢性疾患患者のほか、自己破壊行動や反治療的行為を呈したり、病棟での対応が難しいといったケア困難患者に対して、彼らのセルフケアを促進し、同時に家族を含む集団、組織システムへと介入を行うなど、多くの対象に実践可能で有用であると考えています。その知識・理論や技法は専門性が高く、習得は容易ではありません。しかし、PAS-SCTは有益であり、看護の質を高め、専門性を一層高めるという信念のもと2019年に学会を発足させました。そこから7年間、会員の皆様に対して、毎年の学術集会、年数回開催した専門的なトレーニングや講演、そして学術雑誌の発行を行い、その普及に務めてまいりました。PAS-SCTに関心を持ち、学会活動に関わっていただいた会員の皆様には、これからの実践において、あるいは困難事例に出会う時に少なからず介入に向けた思考の指針としてお役に立てていただけたことと確信しております。また今後も役立てていただけるならば、理事一同非常にうれしく有難く思います。

最後になりますが、今後の皆様のご活躍をこころからお祈り申し上げます。そして、学会の終わりにあたり厚く御礼申し上げます。

PASセルフケアセラピー看護学会

代表理事 山岡由実

理事一同

学会からのお知らせ

本学会のホームページは、2026年3月31日をもって閉鎖します。
学会誌については、本学会閉鎖後もJ-STAGEより閲覧できますので是非ご活用ください。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/passct/-char/ja>

トレーニング検討委員会主催 最終講演&座談会 開催報告

看護の対象となる人々のセルフケアを引き出すために
私たちはどのように関わっていく必要があるのか？



去る6月23日に、トレーニング検討委員会主催の最終講演&シンポジウムが三宮コンベンションセンターとZoomのハイブリッドで開催されました。講演の講師は、南裕子先生、片田範子先生で、講演後には講師2名、岡谷恵子先生、遠藤恵美先生が対談をされました。参加者からも活発な意見交換が行われ、有意義な会になりました。御参加いただいた方々、準備・運営に携わっていただいたトレーニング委員会のメンバー、理事会メンバーの皆様、ありがとうございました。

南裕子先生のご講演、片田範子先生のご講演、座談会の模様を順に報告します。



南裕子先生のご講演の報告

報告者 広報委員副委員長 倉持裕子
(佐賀大学医学部付属病院
精神看護専門看護師)

最初に登壇された南裕子先生のご講演では「看護におけるセルフケアの意味を改めて考えたい」というテーマで以下のようにお話いただきました。

セルフケアとは「個人が自分の生命、健康、幸福を維持するために、自発的に行う活動」です。健康を守るために、自分で考え、自分で選び、自分で行動することです。ケアを組み立てる際、依存と自立を考えるとときにこの基盤に自律があり、自律を重んじるケアがセルフケアです。つまり、自分自身をどうしたいのかというところを引き出し、重んじるケアといえます。ケアとは取り戻せる自律を応援することです。

また、セルフケアとは相手の間に入っていくことであり、相手のことを考え、寄り添うことです。例えば身体の回復が難しい場合でも、「選ぶ」「判断する」「伝える」「決める」といった心の自律性は多くの場合に残されています。それを見つけるのが私たち看護師であり、本人が生きようとする手立てを見つけていくのがケアの基本であるといえます。

ケアの目的は、奪われたことを補う、つまりdeficiencyを看護師が支援し、手をさしのべ補助するだけではなく、その人がその人らしくいられる時間を増やしていくことです。

療養上の世話は私たち看護師の財産です。患者は、自分らしく、自分の自由と可能性を広げていく権利を有しています。日常生活を患者が自分のやり方でできるように支援していくことは私たちの大切な役割です。

また看護師は患者のdeficiencyのみならず、人間本来に備わっている強さをみていかなければいけません。その人らしく、こうなっていきたいという思いや希望が、看護師に伝わっているか、読み取っているか、そこが看護の基盤になると思います。

人間の尊厳を守るとは、ケアされる人の自律が中核にあり、それを表現できる場を作ることです。感染、事故、病気や治療のために日常生活が不自由な人がどのような生活をしたいかを確認するところから始まります。

今年の診療報酬改定では、急性期病院においても療養上の世話のために研修を受けた看護補助者が導入されることになりました。タスクシフトする「療養上の世話の一部」の計画・実施・評価は看護の仕事です。セルフケア看護論の基本にあるのは、病気だけでなく相手の自律を見抜くこと、寄り添えることです。求めていることに近づくことだと思います。



片田範子先生のご講演の報告

報告者 山田顕子
(神戸市立西神戸医療センター
精神看護専門看護師)

片田範子先生のご講演では、「こどもセルフケア理論」をテーマにお話しいただきました。

講演の冒頭では、ナイチンゲールが看護覚書を記した1859年から現代までの社会背景について以下のように触れられました。看護についてはこれまで多様な側面——例えば、目的や実践対象別の方法、専門性、病態別、関係性などについて、専門職としての在り方、「思いやり、足りないところは手をかけたりする人」の相互作用の存在、病院施設だけではなく戦争や、人が負傷した時、人が生まれ死去するその時に、「気にかける人」が存在していることが多いという社会的現象として書き広められ、1971年に「セルフケア不足看護論」、1980年には「看護実践における基礎概念」が記されています。

続けて、セルフケアの大切さと「看護する／されることの陥りやすい矛盾」として、こどもは医療の中では普通の生活と異なる環境に置かれるのだという視点を教えて下さいました。病院という規則ある組織文化の中で、患者と家族は『お客様』としては扱われない主客混乱が起こり、食事や面会についても医療者に管理されます。さらに、こどもは「水が飲みたい」というニーズに対し、家では親がそれを充足してくれるが、病院では「親が医療者に聞いてから与えられる」「親は自宅に帰るのに自分は病院に置いて行かれる」という、理不尽な状況と関係性の変化が起こります。また、こどもたちは親が悲しまないようにと「自分が病気のことを知っているということを親には言わないで欲しい」ということがあり、それを唯一話せる存在が看護師であるとされました。このような病院の組織文化の中で、こどもが「水が欲しい」「親に帰らないで欲しい」と言えることを含め、セルフケアを獲得するプロセスを支援することが重要であることを強調されました。「deficit」という観点で見ると、こどもは「大人と比べてできないことがある」のが普通であり、「セルフの発達こそが小児看護の中心的な要件である」とされました。同時に「親を抜きにした看護は成り立たず、親がいない場合も『親の代わりにそのこどもを誰がケアしているか』を見ていく必要がある。未成熟性のために他者からの支援が絶対的に必要な部分をもつ実在であるこどもを対象に看護をするという、社会的な行為としての看護の専門性がある」と述べられました。

さいごに、オレムのセルフケア理論を基盤に構築された「こどもセルフケア看護理論」に言及され「こどもは『人格を持つ人としての存在』であり、咳をする、呼吸をする、ということを含めて『自分自身をケアする力』を持っていると捉える。こどもは『生きていく力』と『生きている力』、そしてこれから『生きる力』を発揮するということを含めて、『こどもがセルフを持っている存在』と表現することで、こどもの人格を認めようとする看護の在り方に繋がる」とこと、さらに看護者は、接点を広く持っている時もあれば、見守っている時もあるという「伴奏者」であることを教えてくださいました。

上記のご講演を通し、セルフケア看護は単に「代行する」「不足を与える」という行為ではなく、人の持つ力を信じ、引き出し、人が「自分らしくある」ことを支える営みを包含しているということを感じ、社会でこどもを「育てる」とことと看護の「生命を育む」ということに共通する力と視座に触れた思いがしました。



座談会の報告

報告者 広報委員 矢治亜樹子
(西南女学院大学 助教)

座談会は、前半のご講演を踏まえ、南裕子先生 片田範子先生 岡谷恵子先生 遠藤恵美先生にご登壇いただき、看護現場でのケアの実践や理論、特に「療養上の世話」や「セルフケア理論」に対する看護師の葛藤や現場の問題についての意見交換を行いました。現場での看護師の葛藤としては、看護師が患者と寄り添うことが難しいという現状について共有いたしました。現状として特に、ケアと治療の間にあるサポートが断片化していると感じており、看護師が患者と直接向き合う機会が減少していることや、精神看護やセルフケアの理論を導入しようとするが、それが現場でうまく機能せず、看護師自身の役割や主体性が失われていると感じていることなどが分かりました。

そのような背景として、看護師の「療養上の世話」が重要であるという認識がありつつも、それが魅力的に感じられなくなっていることや、看護師自身が、意義深くおこなっている「療養上の世話」や「日常生活のケアについて、数字や数値化されたアウトカムで表現できていないという現状の課題なども共有されました。

さらに視点を広げて考えると、それは看護教育の基盤から引き起こされているもので看護教育が実践と乖離しており、学生が「療養上の世話」に魅力を感じなくなっていること、看護教育が学生にその重要性を伝えきれていないことが背景にあることが浮き彫りになりました。

このような様々な要因が、看護師としての役割への魅力の低下を招いていることなどを共有し、今後の課題として、看護教育の基盤から看護の魅力を伝えること、そして臨床の場で体験し、アウトカムとして表現し続けることを通して看護師としての役割や誇りを実感できるようにすることの重要性を改めて感じることができました。

座談会では、これらの意見交換を通して伴走支援をしながら、ケアとキュアの間を満たしその人を支えていくことが看護の意義深さと、それが難しくなっている現状や看護師の葛藤について参加者それぞれの看護に対する思いや、誇りを共有しながら、これからの実践への示唆を得る時間となりました。

参加者の皆様からのご感想

最終講演&座談会に御参加いただいた方の中からニュースレターにご感想をご寄稿いただきましたので掲載します。皆様、ご協力ありがとうございました。



岡山県精神科医療センター
看護師 杉原弓貴氏

今回、「PASセルフケアセラピー看護学会 最終講演&座談会」に参加させていただきました。南先生の講演の中で、身体の回復が難しい場合でも、「選ぶ、判断する、伝える、決める」といった心の自律性は多くの場合に残されており、これを見つけるのは看護師であるということ、「Care」とは取り戻せる自律を応援することであると学びました。その人がその人らしく居られる時間を作る、増やすために「Care」を行うのが看護の役割であると改めて感じました。また、座談会ではたくさんの意見交換があり、現場で実感していることを共有でき、後輩育成していくために自分がどう働きかけていけばいいのかを考えさせられる内容の濃い時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。



関東労災病院
精神看護専門看護師
ベンジャミン藍氏

座談会にて「看護のアウトソーシング」ということが話題に上がったのがとても印象的で、共に働く臨床心理士に「看護師さんは患者に触れることができるからね。それは心理士にはできないからね」と言われたことを思い出しました。

高齢化が進み介護が増える中で、診療・治療の補助、患者ケアと担う役割が多く、病棟看護師の多くは業務に埋もれてしまっている。その現状にすら気付いていないことも少なくなく、看護ではなく、業務になりつつあることに危機感を感じています。

看護や看護の独自性について、今一度考える必要があると思いました。

参加者の皆様からのご感想(続き)



関西青少年サナトリウム
看護部長(総師長)
福永有紀子氏

この度、PASセルフケアセラピィ看護学会の最終公演&座談会に参加させていただきました。南裕子先生、片田範子先生のお話を目の前で聴かせて頂くなど大変贅沢な時間でした。

看護師の独占業務「療養上の世話」とセルフケアの視点を通して様々なお話を伺い、生活する「自分」であることを取り戻せるよう私たちがどう意識し支えるか・・・またそれは患者さんだけでなく、職員とのかかわり方や自分自身のセルフケアにもつながることを、会全体を通して実感しました。

そしてそこを諦めずに誰でもない私たちが働きかける必要があることを座談会での南先生の強いお言葉の中にも感じました。学会は閉会とのこととても残念ではありますが、今回頂いた様々な言葉を大切に目の前の「人」に関わることを通して少しでも実践で引き継いでいけるようこれからも努めて参ります。貴重な機会を頂きありがとうございました。

編集後記



広報委員会
委員長 松枝美智子
副委員長 倉持裕子
委員 山田顕子 矢治亜樹子

ニュースレター最終号の編集を終え、ほっとすると同時に一抹のさみしさを感じています。振り返るとこの学会で学んだこと、得た技術はたくさんあったと思います。皆様方はいかがだったでしょうか？

このニュースレターが皆様方にとって、考える時間、ほっとする時間を提供できたのであれば大変嬉しく思います、

これまでニュースレターを読んでくださった会員の皆様、興味を持ってくださった非会員の皆様、ご寄稿いただいた皆様へ心より感謝いたします。

私たちは広報委員会の活動を通して学んだことや感じたことをそれぞれのフィールドで活かしていきたいと思います。

最後になりましたが、皆様方の今後一層のご健康とご活躍を祈念しております。ありがとうございました。